

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	愛蘭自治問題 : 論説
Author(s)	中村, 重喜
Citation	龍南會雜誌, 146: 3-32
Issue date	1912-06-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6363
Right	

愛蘭自治問題

中 村 重 喜

(一) "Home Rule" (英國の政界を想ふ)

下院二百の頭顱を叱咤する政黨内閣第一次の試練として、多少の期待を以て迎へられし二十八議會も、有耶無耶のなかに幕となり、今や晩春の細雨、斜に日比谷の破れ伽藍に灑ぎ、原頭落寔として百年の寂寥を守る。而も暗澹たる政界の低氣壓は逐鹿場裡を壓し、矢叫の聲、暗啞の音、天を搖がし地を轟かし、中原の鹿あはれ誰が手に落つるか知るよしもない。顧みて吾國の現狀を思へばそれ果して如何。現内閣の死命を制すべき行政税制の整理は如何。國民の死命を制すべき物價騰貴問題の處置は如何。國家の死命を制すべき軍備問題の解決は如何。

試みに眼を西隣に轉すれば、險惡の風雲は箭よりも急に、支那共和政治の前途は雨か嵐か未だ知る可からず。爪牙を研いで寸隙を窺竄する各國の暗中飛躍は如何。あゝ霞ヶ關裡、陣營肅として白旗動かす、而も又漫々たる春夢、長しなへに晨を忘れたる觀なきにしもあらず。しかず翻つて盟邦英國の政界に想を寄せんには。名將猛士、轡を列べて顧眄の勇を示すところ、自から千里神往の感に堪へない。

英國今日の難問題は凡そ四つと見られる。

第一に罷業問題である。今回の大罷業の如きは、實に未曾有の大事件であつて、豫め相應の準備がなかつたならば、交通機關の如き、全く杜絶したかも知れぬ。國を舉げてコール、クライシスと戦慄しながら叫ぶも

無理はない。藏相ロイド、ジョーヂ氏は今や最低賃金法案を提げて、慘憺たる此の經濟的階級戦の前途に對して一道平和の光明を投せんとする、又今回議會の偉觀たるを失はぬ。

第二はウェールズに於ける國教廢止問題である。國立寺院の維持は、當然國家のなすべき、莊嚴にして神聖なる事業であつて、その廢止は英國をして今日の如き基督教國たるを得せしめすなど説く人もあるが、ウェールズ人多年の希望は愛蘭と異工同曲の結果に終るべきか。

第三は婦人參政權問題であつて、幾多の勇婦連が堂々たる運動は、終に臺閣の諸公を促し、一時は内閣の瓦解をさへ傳へられた政治上の恐慌とも目すべき問題である。終には國民のレフレンダムによる外ないかもしれぬ。

第四は茲に述べんとする愛蘭自治問題であつて、最も古くして而も最も新しき問題である。如何なる譯か此の問題は邦人の興味を惹かぬやうで、諸雜誌新聞等に甚だ稀に散見する小論又は雜報を除いては殆ど吾人の眼にふれない。まさか邦人は權利的獨立的觀念に乏しいのでもあるまいから、或は單につまらぬ、ローカルな小問題と高を括つてゐるではあるまいか。成程ローカルな問題かも知れないが、實に英帝國民の立憲的生活を語る、生ける紀念碑である。英國政界の耆宿バルフォア氏は嘗て此の問題に言及して曰く『吾人の解決すべき此の帝國的問題は單に他の國民が解決したる何れより困難なるのみならず、全く總ての点に於て、その趣を異にしてゐる。しかし吾人が若し此の艱難を排して、解決し去りたならば、吾人の未來は偉大と光彩、平和と文明とに満ちみちて、燦爛たる吾人の凱旋は歴史にその比を見ぬであらふ』と。壓迫と屈從とに慣れたる吾人東洋人の眼よりすれば、彼愛蘭人は何故に合衆王國を以て満足する能はず、莫大の費用と精力と血潮

とをさへも犠牲として、百年の健闘を續けたるか。何故に自由黨政府はその存立の運命を賭し而も巨額の金と共に之を興へんとするか。誠に解すべからざる一種のアレゴリーである。然し茲に偉大なる大英國民の眞價は存する。生れ乍らにして政治家なるジョンブルの國民性を了解し、またその近代政界の眞相を了解するには、一度は此の問題に没頭せねばならぬ。今や英國の政界はホーム、ルールの一語に歴史的激昂を起してゐる。此の問題のために、數十年の難戦苦闘を續け、而も終に、成功の曙光を望まずして倒れた、千載の比を絶つ大政治家ゲラッドストーン氏は後世の爲政家のために、此の問題に關して、忘る可からざる一句を残した。曰く

“History will consign to disgrace the name of every man, who, having it in his power, does not aid, or prevents or relays an equitable settlement between Ireland and Great Britain!”

(II) “Lord of Ireland” (問題の生起)

問題の生起は七百年の春秋を遡る。

頃は十二世期中葉、第二十十字軍が終を告げてより少し後の頃である。プランタデネット家を開いたヘンリト二世が法皇ハドリアン四世から愛蘭征服の允許を得てから、山氣のある貴族の子弟や浪人連は愛蘭土デルモートを助くる口實の下に續々と侵入し、后には王自身に馬を進めて愛蘭卿 (Lord of Ireland) の號を贏ち得た。茲に英國の愛蘭征服史の第一頁は開くる。幾百年を結んで解けざる傷ましき運命の縄はなつた。

十六世期に至り、眇たる獨逸の貧僧が憤然として法皇の破門狀をウツテンベルヒのエルスター門外に焼い

てより、歐州の天地は炎々たる宗教改革の焔の裡に葬られたときも、百里の海は遂によく此の島に飛火を許さなかつた。

かのクロムウエルが英國の政柄をとつたとき、愛蘭は殆ど彼が鉄騎の蹄に蹂躪せられ分與せられて本問題の中心をなす大地主制度の濫觴をなしたのである。更に名譽革命の際は、愛蘭人は舊教徒たるジームス二世の肩を持つて服せなかつたのでウィリヤム三世の兵を蒙り新敎國たる英蘭の支配を受くる事となり、英愛の交渉は愈々宗教的色彩を帯びて來た。

十八世紀の中葉、新英蘭^{ニューイングランド}の民がボストンの朝風に獨立の旗を翻してより七年十三州の山河漸く、美しき自由の光を浴びんとするや、愛蘭の志士グラッタン (Henry Grattan) 蹶起して義を四方に唱ふれば風を望んで之に和する者十萬人、茲に愛蘭の獨立を宣言し、兩國は全一の王を戴けども愛蘭議會は英國議會と同様なる立法權を附與せらるゝ事となつた。時は千七百八十二年である。

爾來兩議會は枘鑿相容れず水火相闘ぎ、兩立は到底不可能の形勢となつた。しかもし英國議會が愛蘭議會の權限に縮少を加ふるが如き舉に出でんか、愛蘭は忽ち分離するの勢を示したので、此の際英國の政治家のとつた唯一の策はその議會の腐敗策であつた。

金力と權力とを以てせば浮世は擒縱顛起、心の欲するまゝになるかも知れぬ。權門に攀縁し、財閥に阿附し、その走狗となり爪牙となつて、その殘肴余瀝に舌鼓うつ議員の種は何處の空にも絶わぬと見ゆる。紛々として黃白の散する所、天晴悲憤骯髒の士も忽ち軟化し忽ち醜變し所謂「何れの議會にも曾て見ざる最も汚劣なる腐敗」見るに至り、グラッタン等の如き、骨力峭健、氣節高勁、眞に天下俱瞻の中に國政を議すべき人は袂

を振つて議會を去り、千八百年兩國は合併されて合衆王國 (The United Kingdom) をなし、茲に慘憺たる、一句一涙、讀むに堪へざる愛蘭壓制の歴史が始る。

あ、醜惡なる腐敗議員によつて賣られたる愛蘭の自由が、如何に高價なる犠牲の下に贖はれざる可きか、是れ吾人の説かんとする所である。

(III) "Irish pariah" (舊教徒解放)

愛蘭國民の自由は賣られた。賣つた議員は爵位を得た、勳章を貰つた、土地も得た年金も手に入れた。而して國民の得たるものは何であつたか。

聯合以前に於ける愛蘭の財政は頗る潤澤で、ダブリンには宏壯なる税關が新設され、當時にあつては異數なる一千五百万圓の大資本を以て愛蘭銀行も設立された。愛蘭の前途は洋々として春の海の如く、輝く希望の光りに充ち充ちてゐたのである。而して聯合後は如何となつたか。愛蘭は英國國債の十五分の二の負擔を命ぜられ、而も新に種々の苛税は遠慮容赦もなく賦課せられ、田園荒蕪し、産業衰頹し愛蘭の國債は一躍して十倍の巨額に増加した。爾來國民は此の殘酷なる壓抑の下に、無效なる反抗と悲慘なる呻吟とを繰り返した。當時既に土地は數百人の大地主の所有に歸し、土人 (愛蘭人はブレトン人の后裔でケルト種に屬するのである) は小作人として非常に高價な地代を拂つてゐた。聯合の際は、愛蘭からも上院に三十二人、下院に百人の議員を撰出する事が出来たが、同時に、千百六十七三年發布せられた審査律^{テストアクト}が愛蘭に適用せらるゝ事となり、舊教徒たる者は一切、議員又は文武官吏になれぬので、舊教徒たる愛蘭農民は全く奴隸的境遇に陥り、議員となるは例の英國人たる地主ばかりで、農民は議會に何等の發言權をも有せなかつた。

自由を奪はれたる愛蘭人のその代りに得たるものはかゝる境遇であつた。しかし斯様な境遇は長く堪ゐらるべきものでない。幾百萬の愛蘭人が鬱憤の念は遂に一人の愛國者を産んだ、オーコンネル (Daniel O'Connell) は愛蘭のために戦を開いたのである。

オーコンネルを解するためには當時の愛蘭の政界を解せねばならぬ。殘忍峻嚴を極めた「^{ビジュアルロー}一處刑法」は既に聊か寛大となつたが、前述の如く舊教徒は依然として隸屬の狀を擺脫するを得ず、恰も一種の parish の様であつた。彼オーコンネルは夙に愛蘭の研究に心を潜めてゐたが、痛く舊教徒の領袖連を失望せしめた千七百九十八年の暴亂と千八百年の聯合とで、成功の期は果てしもなく遙なるを悟り得たのである。

彼は生粹の舊教徒で、舊教のためには滿腔の熱血も、滿身の精力も、之を傾け盡し、之を注ぎ出すて顧みなかつた。彼は舊教徒の精神に及せる新教政府の勢力の微弱と舊教教會の感化の偉大とを知るや彼の政治的運動の方針は定まつたのである。

彼は千八百二十三年一キャブリック協會を設けて是が首領となり、撰ばれて議會に入るや、自由の名に於て舊教徒制限法の廢止を叫び、其の效空しからず終に議會の容るゝ所となり、ジョージ二世の反對にも係らず内閣は斷乎として、内亂を避くるために已むを得ざる手段として王に迫り、後繼内閣もなかつたので、王も終に屈し、舊教徒宥釋法案は法律となり、所謂舊教徒の解放となり、舊教徒も上下兩院議員並びに文武官吏となる事が出来る様になり、愛蘭の政治問題は一段落をつけたが、愛蘭問題はやつと初期微動を終つただけである。宗教上、殊に經濟上の壓制は依然として愛蘭人をして怨嗟と呻吟とを續けしめたのである。

見よ、"the three branches of the upas tree" は淺緑、猶洗ふが如く、遙に彼蒼の雲を呼んでゐるではないか

此に一大斧鉞を墜下して、百害の本を斷つ可き一大政治家の出現を要する。ゴルデイヴムの結ばればアレキザンダーを待つて解けた。時代はグラシドストーンの舞臺に入る。

(四) “The upas tree” (虞翁の改革)

“My mission is to pacify Ireland” と叫んで虞翁は千八百六十八年第一次の内閣を組織し、翌年愛蘭國教廢止案を提出した。
スタブリックメント ビア

茲にまた、當時の愛蘭の狀を述べる必要がある。五百萬の人口を有する愛蘭に於て、國教たる新教を奉ずるものは六十萬人に過ぎず、即ち八分の七は舊教徒であつた。然るに彼等は舊教教會の維持費を支出すると同時に自分の信じない、所謂 “alien church” のために多額の維持費を徵集せらるゝと云ふ有様であつた。案は議會を通過し、その結果、英國教教會は愛蘭に於ては、國教たる資格を失ひ、その裁判權、收稅權は剝奪され、教會所屬の不動産は永住的借地人に賣り下げらるゝ事となり、宗教上の問題は形式上は落着した。併し耕地上の問題に至つては更に錯雜紛亂を極めて手輕に片付く問題ではなかつた。

上述した如く、愛蘭の土地は悉く大地主の所有に歸し、その地主の議會の權力を擁し、愛蘭には管吏人を送り、高率の借地料を徵收せしめ、少しでも滞納すれば、直に契約を解除して、飢を路頭に叫ぶも恬として顧みなかつた。

當時農民の狀は實に酸鼻を極め、千八百三十五年の政府の調査によれば、その貧困窮乏の狀は言語に絶し、悉く汚穢黯黒なる泥塗の小屋の薄暗い光りの中に蠢動し、甚しきに至つては牛子屋や豚子屋に、糞尿に塗れて雨露に堪へ、紛々たる臭氣の中に、檻穽を纏うて寒を防ぎ、例の馬齡薯を齧つて飢を凌いでゐた。

有名な馬齡薯の凶作に打ち續いた、千八百四十六年の飢饉の際の如きは、其の慘狀をいつたら實になかった。ヨボヨボした幽靈の様な貧民の群は市街に集り來り、犬の様に掃溜を漁り廻して、食べるものもあつたそう。實際疊々たる餓卒は原野に街頭にみち満ちたのである。野に菜色ある位の騒ぎではなかつた。Thomas Davis の *eviction* に關する詩、Mangan の “Dark Rosaleen” の如き詩は愛蘭の窮狀を描いて余蘊なく、同島牧民官の教科書と稱せられた。

貧すれば濫する。愛蘭の風雲は益險惡に赴く。有名なフェニアン秘密結社 (The Fenian Brotherhood) も此の時分に組織せられた。此の結社は他と多少趣を異にし、本部を北米に置き John O'mahony や John Stephens が牛耳をとり、千八百六十三年には市俄古に大會を開き、愛蘭を獨立共和國たらしむるを理想とすと決議した。此の年から三年ばかりが最も此の結社の活動した時であつた。“head-centre” と云はれたスチーブンスは六十五年に驚天動地の快舉を企てたが、あはれ一内通者のために計畫曝露し、幾年の間嘗め盡した辛酸苦楚も、遂に徒勞に歸し回天の偉業も火の泡となつた。

不成功には終つたが此の舉は英國人の胸に深く何物かを印した。耕地問題の根本的解決案として千八百七十年虞翁は第一次の農地條令を發布した。要するに地主が小作人に土地の返還を命する場合には其の地内にある小作人の建築物や耕作物に對して相當の代償を拂はしめ、同時に國會は夥多の土地を購入して小農民に拂ひ付け、又秩序平和を維持するために愛蘭を非常法の下に置く事とした。が不幸にして此の法案には種々の缺點があつて殆んど無効能愛蘭は依然として一團の烈火である。

○“The uncrowned Irish king”

今までの愛蘭の反抗は、何等の統一なく何等の訓練なく頗る不規則乱雑であつたが、愛蘭人も悟る所あつてか、政黨組織の機が熟して來た。

當時愛蘭のために健闘を續けてゐた二種の團體があつた。一は議院内の愛蘭黨で大政黨以外に犖然として孤立し、富有な同僚議員よりは、殆ど眼中に置かれなかつた小數黨であつた。二は愛蘭に於ける農民黨で土地回收 (Eviction) の恨を晴すために、地主や支配人を暗殺するとか、家畜を殘害するとか頗る狼籍を敢てし「White-boys」とか「Moonlighters」とか呼ばれた一類であつた。

窮すれば通ずると云ふが、復讐の方法も考ふれば旨いものと思ひ出すものだ。例のボイコット (Boycotage) は當時の愛蘭農民の發明である。農民聯合を組織して地主の土地立退命令に對抗し小作人を無理に立退かした地主の土地は借らぬ事とし、一切交通を絶つた。最初に此の槍玉に擧つた人が Captain Boycott で、英語の亡びざる限り此の人の名も亡びる事はあるまい。思へば人はどんな事をして不朽の名を残すか分つた事ではない。餘談に走つたが要するに是等の者を一糾して愛蘭自治黨を組織し、自らその着領となつてその自由戦争に一時期を劃した人は誰あらふパーネルである。

「The Uncrowned Irish King」として雷名を一世に轟した Charles Parnell は愛蘭人の血は一滴も受けず、父、は英系で母は米系であつた。ケムブリヂの出身で新教を奉じ家は地主で愛蘭の事などは一向無頓着であつたが母は愛蘭人に頗る同情を表し前に述べたフェニアン暴亂の際、叛徒の一人が白刃を潜つて逃げて來たのを隠匿つて置いたが、到頭、英國の警吏は之を嗅ぎ出し、捕縛のため神聖な母の私室にまで踏み込んだのを見て、彼パーネルは其の四十六年の生涯を通じて一日も忘れなかつた深い——英國に對する嫌厭憎惡の念を抱いた

さうである。或は史家の評によれば彼が愛蘭に對する愛情は疑はしいとして。彼の英國に對する嫌惡は確だと云ふ。

デイスレリーは國威發揚の手段として水際立つた派出な遣り方でいつたので、財政は困難に陥る、而も愛蘭には凶作が続く。何となく殺氣立つて來た此とき、バーネルは遙にフェニアンの徒と呼應して國民土地同盟 (the National Land League) を組織し、所謂 “The three F’s” (Fair rent, Fixity of tenure, and Free sale) 即ち至當の地料・借地權の固定、自由賣買を三綱領として全島内の財産關係を根本より顛覆せんと圖つた。愛蘭の總督であつた Forster が是を “an illegal and criminal organization” と恨めしうに罵倒したのも實を云へば無理でないかも知れぬ。

併し何と云つても、バーネルは議會では眇たるの一個少數黨を率ふるに過ぎぬ。彼の意見が眞面目に傾聴せられやう筈はない。而も尙此の際に處し、僅少の議員を指揮して縱横に切り靡かした彼の策略は例の議事進行妨礙策 (The Obstruction policy) であつた。要するに、*“If you will not listen to our Irish national claim, then we will not to discuss any other question whatever of which we can prevent the discussion.”* といふのである。由來コンヴェンションを唯一の守本尊としてゐる英國の議會では、どんな駄辨愚問でも之を制止する事は出来なかつたと云ふ事に乘じたのである。愛蘭の議員連は御互ひに申し合はせて、思ひ切つて長い演説と、極めて餘計な修正案の連發とをやつた。ある南亞弗利加に關する法律案の討議は水曜日の朝から翌朝の午後二時まで、千八百八十一年愛蘭の強壓法に關する討議には月曜の午後四時の水曜の朝まで打ち續いた。昨日今日は僅か一時間の講義を聴いてもともすれば臉に千鈞の重さを感じ、吾れにもあらず、つい失敬する

事があるが、思へば下らぬ演説に二晩三日も傾聴せねばならなかつた英國の議員連も因果な人達であつた。後に「故意に議事進行阻礙のため」の長演説をある條件の下に掣止する事となつたが尤であるかも知れぬ。さもばあれ、斯様な手段に訴へねばならなかつた彼等の心裡も憐む可きではないか。或る人は一期の間に五百回の演説をやり、其他も平均四百回宛をやつた年がある。冗談で出来る事ではあるまい。撰舉民への御土産演説とは多少撰を異にしてゐるではあるまいか。パーネルは云つた。吾人は國會より直に國民に訴へるのであると。

三寸不爛の舌頭に迷る彼等の熱血は終に英國民の同情を湧かしめ、千八百八十年虞翁が第二次の内閣を組織するや、就職の翌年、第二次の土號條令を發布した。要するに前述の“The three F's”を多少の修正を加へて是認したものである。が當時愛蘭の貧困は英人の想像以上で土地購買に要する全額の四分の三を支給してその殘額を支拂ふ事が出來ず、折角の法案も愛蘭の不幸を救ふには、所謂テームス川に一杯の水を投ずるに過ぎなかつた。自治黨の領袖連は姑息彌縫の策なりとして極力之に反對し、土地全盟會がダブリンに召集した國民大會に於ては『政治的社會的罪惡の原因は、外人專治の制に存す。之が唯一の救済策は愛蘭に自治制を與ふるにあり』と決議した。問題は一轉機を齎して新生面を開いた譯である。パーネルは公言して曰く『今後は決して借地料を拂ふ勿れ。苟も政府が暴逆を止め、吾人に憲法上の權利を復するに非る限りは之を拂ふ勿れ。國民の自動的運動に關しては兵力の壓迫も畢竟何するものぞ。』

○“The Kilmainham Treaty”

時の愛蘭總督オルスター氏は悉く此等の領袖連を捕縛して仕舞つた。パーネルも無論である。フオルスター

は彼等と呼んで“village tyrant”とか“dissolute ruffian”とか“village Hamlet”とか呼んだ。餘程恨が深かつたと見ゆる。

其の中に自由黨内閣も悟る所があり、キルメンハムの圍圖に呻吟してゐる自治黨の首領と妥協を遂げ彼等を悉く解放した。是が世に謂ふ“The Kilmainham Treaty”とは是である。

八十二年、無敵團(The Invincibles)と云ふ秘密結社員がフェニクス公園に於て、白晝、時の顯官を暗殺した。“The Phoenix park murder”事件の際の如きバーネスは極力非難の態度をとつた

八十五年虞翁は、三度首相の印綬を帯びるや、土地購買金の全額を一時支給し、四十九年間に年四分の利を附して還附せしめる事とし、勤直な愛蘭農民はよく是を利用したので、自然と大地主制度を破壊する事となり、耕地上の問題は漸次解決の途についた。茲に問題は再び政治的方面に向ひ、波瀾萬丈の佳境に入る。

○“Absolutely separated Irish parliament.”

未だ五時と云ふ人顔も見ぬ冷たき春の朝、議場の扉は推し寄せる人波に破れんばかりである。定刻の六時、此の蕩漾する人波は吸ひ込まれるとはや立錐の隙間もない。虞翁の姿が演壇の後に浮び出た刹那、嵐の様な拍手が起る。

やがて海の底の様な靜謐と寂寞が来る。

隅々まで透る、波瀾あり光彩ある一代の大オレーターの聲と時々起る拍手の響とは三時間半を一瞬に縮めた時は千八百八十六年四月八日、虞翁は愛蘭の要求の却く可からざるを悟り、終に第一次の愛蘭自治案を提出したのである。千八百八十一年から六年間に四十以上の強壓法案が制定された。而して愛蘭の暴亂は是によ

つて蠲壓する事が出来た。併しその治療には没交渉であつた。流石虞翁の炯眼は遮般の消息を看破して、茲に此の案の提出となつたのである。

此の法案の中心思想は "absolutely separated Irish Parliament" であつた。今後の自治法案の基礎をなすものであるから、その大略を掲げよう。

(一) 愛蘭は爾今ウェスミニスターの英國議會に議員を送る事が出来なくなつた。

虞翁の説明によれば、帝國的事務と非帝國の即地方的事務の間に確然たる線を劃する事は不可能だからである。 "I believe that it passes wit of man." と此の際はいひ口を辿らしたので、後に大に閉口する事となる。

(二) 課税に關しては、新議會は、關稅又は是に關する内地消費税を除く外、一般的の課稅權を附與せられた。即ち英愛の財政的聯合は嚴として維持せられたのである。

(三) 愛蘭議會は皇室、國防、外交等に關しては其の立法權を制限せられ、或る特種の宗教に補助金を與へ又は之を國立とする權能なく、其他造幣、度量衡等に關しても種々の制限を附せられた。

(四) 議會は二院制であつて上院は二十八人の終身議員と七十五人の年限十年の撰出議員とより成つた。下院は二百〇四人の現制度の下に選出せられる議員より成立した。

五) 行政に關しては樞密院の助を有する大守は依然任命せられた。

此の法案は各方面に激烈な反對を受けた。チャムパーレンの如きは、もし此の法案が經過したら、帝國議會の最高權は "the baseless fabric of vision" となる酷評した。

茲に悲しむ可き自由黨の分裂が起つた。

ヤムバーレン、ハイチントン等は決烈袖をつらねて自由黨を脱し、新に自由統一黨 (the Liberal Unionist) を組織し、虞翁の政策を以て帝國の統一を破壊するものとし、保守院と提携し、大多數を以て該案を否決し去つた。虞翁は議會を解散し、國民の意向を総選舉に問ふたが、事利あらず、終に旗を捲いて去つた。

此の際、チャムバーレンは自ら工夫して一個に自治案を發表したが、折角の名案も肝心の愛蘭人が賛成せず、否賛成どころか殆一瞥をも與へぬのでオジャンとなつた。或る議員の如きは是れ “Popkin's plan” なりと罵倒した。是は彼のデイスレリーがビールルの穀物法案の拒絶案を論じて、此案たるやビールルの案に非ずして、ポフキンの案なりと斷じ、突如、シナをつ造つて “I object to having the country compelled with Popkin's plan” と叫んだのから來たさうである。

さて、サリスベリー候は保守黨の内閣を組織したが、愛蘭は相變らず紛擾を極め、農民と警吏との衝突に一日の寧日もなかつた。政府は鎮撫のため愛蘭治罪法を制定し、治安判事に權利を附與し、一方には農事改良に盡力した。千八百九十年、凶作のため物價の激騰を來し、愛蘭の低氣壓は險惡の兆を示す。後二年政府は愛蘭の改良案を提げて議會に問うたが、自由黨のため、一喝の下に拒絶され、八月内閣を去り、虞翁その後を襲うて第四次の内閣を組織し、自治問題のために最後の一戦を試みた。

○“a really great career”

丁度此の前後に大事件が起つた。それはバーネルの死である。バーネルに就いては大分語り残した事がある。虞翁が第一次の自治案を提出した翌年四月十八日、タイムズ紙上に英國の政界を驚倒した一私信が發表せられた。それにはバーネルの署名があつて、是によれば彼は實にかのフェニクス公園の暗殺事件の傀儡師であ

つたと推せらるゝのである。英國にとつても愛蘭にとつても青天の霹靂であつた。世論囂々として洶湧を極めたのも無理はない。

併しバーネルは斷乎として否認し“a villainous and barefaced forgery”と呼び、セクストンの如きも“a base, manifest, clumsy and malignant forgery”と呼んだ。バーネルは議會の委員會の審査を受ける事となり、長い間かゝつてやつと贋造と云ふ事が分り、それが議會の報告せらるゝ際、バーネルは靜に議場に入つた。期せずして、全員殆ど悉く起立し、割るゝ許りの拍手を以て迎へた。バーネルは腰を下すとき、隣席の人に叫びた。

“Why did you fellows all stand up? you almost frightened me”此の時が恐らく『無冠の愛蘭王』の全盛時代であつたらふ。やがて不祥なる事件が起つた。

それは彼と Mrs. Shee との姦通事件である。今まで彼の腹心股肱として忠勤を抽んでゐたシエアは公然と法廷に爭ひ、終シエア夫人は破鏡の嘆を見たがやがてバーネル夫人となつたから驚く。

此の不仕鱗のために愛蘭黨は分裂を起しその大部はバーネルを棄てゝ顧みなかつた。囂々と聾するばかりの非難攻撃の間にも、彼は“The English wolves howl for my destruction”と高うとまり泰然自若として屈せなかつた。

折柄補缺選舉があつたので、彼は多少意地から否でも應でも勝たねばならぬと、平日の冷靜と沈着にも似ず手負ひ猪の様に狂奔し“Best description”と友人の忠告も退けて激烈なる運動を續けたが、果せるかな過勞の結果、逐鹿場裡に倒れて再び起たなかつた。時に千八百九十一年享年四十六歳の働き盛りであつた。彼逝い

て愛蘭黨の統一の困難に赴くに連れて彼の器局の大なりし事は益々認められて來た。虞翁は“a really great career”と深く衷悼と嘆賞の聲を發した。

あゝミラボーの放逸は佛蘭西の國家を誤つたとか。あたゝ無冠の帝王を咲きも摘はぬ花盛りに散らした朔風嬉雨の凄まじさよ。金襖の蔭、蘭燈のはとり、擒縱殺活の手腕を弄し、萬斛の哀艶よく紅恨紫怨の趣味を解するを以て政客志士の一要素と目する邦國に於て殊に然るを思ふ。

○“Hawarden”

千八百九十三年、虞翁は第二次の自治案を提出した。今回は前の失敗に鑑み、愛蘭よりも八十名の議員を選出して英國議會に出席せしめる事とした。八十二日に亘る烈火の様な大激論——自治黨と保守黨とは攪み合まで演じた末、四十三票の差で下院を通過したが、上院では三百七十八票の大多數の差で否決せられた。意外である。餘りに酷であつた。虞翁は必ずや決を総選舉に問うて職を辭するであらうと萬人悉く豫期してゐたが、彼は默として之に屈從し、翌年突如として冠を掛け、ハワーデンに隠れて伐木丁々の仙韻を樂む道翁となつて仕舞つた。遮個の消息は今尙政界の謎とする所である。

千九百一年 Baillour 氏首相となり大地主制度に打撃を加へてより荏苒今日に至り、二十年振りにアスキス氏は虞翁の志を嗣いで、自由黨の運命を睹して第三次の自治案を提出した譯である。

(五) “Meding or Euing”

(上院改革問題)

虜翁は千八百九十四年敎區參事會案の討議の際に忘る可からざる演説をやつた。

“In our judgement, this state of things can't continue.

聲は一層、莊重森嚴の極を盡した。自由黨の側よりは急激の様な喝采が起る。

“For me, my duty terminates with calling attention of this House to a fact which it is really impossible to set aside - that we are considering a part, an essential and inseparable part, of a question enormously large, a question that will demand a settlement, and must at an early date receive that settlement from the highest authority.

マッカーシーは其著現代史に於て、Jean Paul Richter の “Fliegeljahre” なる小説にあるてふ美しいロマンスを語る。Vult, Walt なる双子の兄弟があつた。兄の Vult は都合があつて、弟にも明かさずに遠國に行かねばならぬ。吾が愛しの弟を見るは是れが最後かと暗涙を吞んで、別れの一曲とフリユートを弾じつゝ袂を分つ。それとは知るよしもなく、弟は快よげに、消ゆゆくフリユートの音に聞き惚れる。

英國議政史の花たる “old man eloquent” が六十餘年の戦を續けた戦場に對する最後の別辞であつた。神ならぬ身のそれとは知らず、議會はいつもの様な喝采を送つた。虞翁其後二日にして光彩あり波瀾ある長き公生涯を終つたのである。而して彼が最後の演説は實に、上院に對する最初の鳴鏑であつた。

保守黨が上院の天險に據つて、政界の風雲を叱咤する間は、自治案の躍起運動はペーベルの塔を築くに異ならぬ。上院の改革は自治案の提出に先つべき必然的前提でなくてはならぬ。ローズベリー卿は民主的改革の要件として上院の改革又は全廢 (Mending or Ending) を叫び憲法上の改正を要求するために、下院に一の決議案を提出する期あるべしと威嚇したが、終に立法的發議とならずして止んだ。

一昨昨年、藏相ロイドジョーヂ氏は勞働黨のために、養老年金法を制定し、巨額の支出を余儀なくせられ、而も一方には異常なる、獨乙の海軍の擴張に不安を抱く輿論に動かされ、軍事費の財源として増税の必要に迫られた。が多年自由貿易を唱道する自由黨内閣として關稅増收の舉に出づる能はず、幾多の新税を起したが、富者に重く貧者に輕きの故を以て社會主義内閣との譏を受けたが豫算案は愛蘭黨の協賛によつて下院を通過した。上院は一度國民に訴へたる後に非ずばとて豫算案を拒絶した。自由黨の激昂は非常な者であつた。上院は自由黨内閣就職の年より種々の政府案を否決して來たが、豫算案には一指も染めなかつた。クラスを代表する上院はマスを代表する下院の豫算案を否決する事は殆ど空前で、神聖なる議政史上の不文律を蹂躪し終つたのである。ロイドジョーヂ氏は

“A fourth dissolution of parliament in the course of four years! Do they really think the people of this country is a fool?” と言つた。アスキス氏は “We shall not hold office, unless we can secure the safeguard which experience shows to be necessary for the legislative utility and honour of the party of progress,”

と明言した。事を輿論に決するために千九百十年一月末總選舉は行はれ、中原の鹿は自由黨の手中に落ちたが、統一黨との差は僅に十二票の際ぎい所であつた。而して自由黨内閣の死生は一に愛蘭黨の向背に歸し、茲に自治案提出の傍因をなしたのである。

事は一髪の機に動く。政府は此の好機に乘じ、上院の豫算否決權を剝奪し、尙その組織を變更して若干の民選議員を加へんとした。議論沸騰その決する所を知らず。決を王に問ふより外に仕方無くなつた頃、時なる哉五月六日エトワード七世は瀝焉として崩せられた。新帝即位し、首相は新貴族製造を以て上院を威嚇

し、上院また其の意を容れて、三年間續いて下院を通過した議案は、上院の採否を論せず、直接、王の裁可を経て法律となる事となつた。自治問題の豫備運動はかくの如くして成功した。將士慘として驕らず、陣營肅として白旗靜に、山雨來らんと欲して風樓に滿つるの概がある。

(六) “Royal city” (ベルファスト演説)

陰鬱なる北國の雲は低う垂れ、幾日をかけて晴れぬ雲交りの二日の雨は篠つく様に降りしきる。

北愛蘭ベルファスト郊外の大蹴球場には、驚くばかりの大天幕が張り廻され、北吹く烈風に煽られて、灑ぎ降る溜水は宛として瀧のやうだ、道は一面に骸炭を以て敷き詰められたが、水は溢れて尙靴を没する。此處に一團、彼處に一團、劍佩鏘々として寂寞を破る。時は二月の八日、第三次自治戦争の火蓋を切つた演説會場の光景であつた。

本題に入るに先ちて、アルスター州に就て多少の説明を加へやう。愛蘭は四つの縣に分つ。Olenster, Connaught, Munster 及び此の “Ulster” である。

アルスターはその最北に位し、人口は百五十萬ばかり、多くは蘇格蘭人で十七世紀の頃移住したのである。アルスタートと云へばよく人は悉く新教徒と考へてゐるが、實はその半数より少し多い位に過ぎないのである。若し自治案が實行されて、舊教議會の支配を受ける様になつたら、單に宗教上のみならず萬事迫害を受けるだらうと、必死の反抗を續けるので、さらぬだに紛糾錯綜を極むる問題は、益々波瀾萬疊の景を呈するのである。

虞翁が第一次の自治案を提出したとき、ベルファストの大會に於てランドルフ、チャーチル卿は Ulster

would fight and would be just”と云ふ有名な句を吐いた。スペクテーターは嘗てアルスクー人が柔順しく自治案の實施を默認するのであらうなと考へてゐる人は“fools' paradise”に御芽出たい夢を見てゐる人であるといつた。

此處が統一黨の根據地で、此處選出のカーゾン卿が、今や自治反對運動の采配を振つてゐるのである。而してヘルファスは實にその心臓部で “Belfast is the key of the Irish problem, it may be led, but cannot be driven” と云はれた、地である。

未だ春淺る二月の空、Wiston Churchill 氏 John Redmond 氏 Joseph Devlin 氏並に Pirie 卿孤軍長驅して直に敵の牙城を衝いた。旌旗既に動く。雨か嵐か。

愈此の事が公表せらるゝや、ヘルファストの慨昂は非常なものであつた。統一黨アルスター常置委員會は直に一篇の決議を公にして、此の勤王市に於ける賛自治案演説にあらゆる妨害を加ふべしと誓つた。一行も會場として新教街の中心たるアルスター、ホールを得たい希望であつたが、遂に讓歩し、舊教街のセント、メリー、ホールを得んとして是も失敗し、やつと前述の蹴球場で開く事となつた譯である。チャーチル氏は自治案を三つの立場より觀察して其の利を説いた。(一)に曰く大英國の立場より、(二)に曰く議會の立場より、(三)に曰く愛蘭の立場より。(一)に於て英政府が本國に於て愛蘭人に正當なる待遇を與へざる結果、海外に於ける英政府の施政は事毎に愛蘭人のために妨害せらるゝを説き。

(二)に於て、大英帝國の事務を、中央的のものと地方的のものとに區分し、地方的性質を帶ぶるものは之を地方議會に委ねば中央、地方共に事務の進捗と注意力の集中に於て頗る得る所あるべきを説いた。

此の第二の点は現内閣の極力主張する所で、外相グレイ氏は Hald Spender 氏の著した自治に關する書に序して曰く『英國の議會は世界の模範なりと目せられてゐる。しかし最近五十年に於ける、合衆王國の特別なる一部分、又はそれ全体、若しくは英帝國に關する事務の増加は實に恐ろしい。將來に於ても無論、此の三つのカテゴリーに於て事務は益々錯雜となるであらふ。之を強いて一議會で處決し行かうとするなら遂に笑を后世に貽すに止るであらふ云々』

首相アスキス氏も嘗てナツシ誌上に述べた。曰く此の憲法上の問題、近き將來に於て生起し得る最大の憲法上の問題は、帝國議會をして單に中央的事務を處理せしめ、地方的なるものは之を地方の知織と意見とに委ねんとするのである。而も此の問題たるや實に焦眉の問題であつて、此の目的は如何にしても遂げられねばならぬ。吾人は強壓と和解の間を曲折し、而も遂には出發点に逆戻りする、長い間踏みならした望もない逕路を幾時代ともなく辿らねばならぬのか。唯吾人のとるべき唯一の手段は英國民を更に一段高い觀察點に導き、英帝國發展の保障は帝國最高權と地方自治の結合に存する事を愛蘭の場合に於ても認めしむる事である云々。併し此の事務を中央的と地方的とに分つと云ふ事は、先きに虞翁が云つた “It is impossible to draw a distinction between affairs which are Imperial and affairs which are not Imperial. I believe that it passes the wit of man.” を撞着して、アスキス氏等は全知全能の神様となる譯となるが、時勢の暗遷默移も面白い虞翁も九泉の下に破顔一笑するであらうか。

(三)に於ては、特に新教徒に向つて、ダブリン議會の不正なる決議を否認し得る帝國議會あり、萬一の紛擾を鎮壓すべき帝國軍隊あり、而も議會に於ては兩教徒を公平に代表せしむるを以て危惧する必要なしと説いた。

氏の自治案に就いて、第三次自治案の内容を視へば、第二次のと大差ない。

先づ帝國議會の最高權威を承認し、現制のまゝ毀損せられず、愛蘭議會は元老院セネートと衆議院ハウス・オブ・コモンズとより、成りその立法權は唯愛蘭に關する事のみに限りて附與せられ、又別表を以て同議會に容喙の權利を除外したる事、前回の案に全じく、宗教上には HOME RULE が ROME RULE かなど非難あるを以て殊に細心の注意を拂ひ、新舊兩徒の信仰の自由を保証する特記但書を附加し、愛蘭議會にもアルスターより五十九名の議員を送るを得しめ、而もある特定の宗教（無論舊教を指す）に保護金を與へ若しくは國教とするを禁じ、學校の教師に宗教的の制限を附するを許さない事とされた。

議員數は上院は百六十四名で帝國任命執行委員の選定を受け、下院は百六十四名。帝國議會と愛蘭議會との關係は第二次案に同じく、愛蘭よりも議員を送る事を許されるが、其の頭數は四十二名に遞減せられた。

困難なる財政上の關係に於ては帝國議會は愛蘭議會に寛大なる出立スケートを與へ、土地買収並びに養老年金は依然として繼續すべく、其他に關しては左の如き方針をとる事とした。

- (一) 愛蘭財政のシステムとキャラクターとは合衆王國結局は英帝國の根本的方針と合致するを要し
- (二) 愛蘭議會は當然財政の實權を有し、責任あり條理ある範圍内に於て、新税を起し、歳入を補充する權能有する。

チャーチル氏の演說終つてレトモンド氏は起ち、その全部を承認し、愛蘭に議會を附與する場合には無論、その權能を濫用せしめぬ條件を附加するは當然の事である。若し信仰の異同のために、此の權能を利用して迫害を加ふるが如き事あらんか帝國議會はその最高權を以て直に之に容喙すべく、アルスター人は舊教議會

の支配によりて何等の不利をも蒙る事なしと呉々も述べた。

蜜柑の皮や鐵片などは雨交りに降つたが、幸にも流血の慘を見ずして終つた。泰山鳴動して鼠一疋の感があつたが、裏面を流るゝ暗流は箭よりも急だ。反對黨は快よく挑戰に應じ、一矢を酬ひてその意を明にした。

現黨一黨總理 Bonar Law 氏は去月九日、海を越えて愛蘭に渡り、ベルファストに於て自治反對の大演説會を開く。會する者一萬五千人、氏はアルスター人は必ず自治に屈服する事なきを信ずと斷言して歸つた。更に同黨幹部連は自治問題を各方面より研究せる意見を掲げた一篇の書を現はし、ボナ、ロー氏は序文を書き、前總理バルフォア氏は歴史的研究を發表した。

夙に帝國主義詩伯としてジョンブルの精神を代表すと稱せられたキツプリング氏は、モーニング、ポストに激烈なる自治反對の詩を掲げたそうである。かくて兩軍は最初の火蓋を切つた。かくて政界の低氣壓はベルファストを去つてウエストミニスターに襲來する。

(七) "On the Eve of the Irish Home Rule Bill"

(なる題下に、William Stead氏は北米評論の三月號に一篇の文を寄せた。二十世期の科學と黄金の誇りなる四萬五千噸のタイタニック號が自然の戯れに "Unsinkable" な語を強き一種のアイロニーとして殘し一千五百の生靈を幽冥界に齎し去つた、史的悲劇に於て、氏や從容として死地に就いた一人であつた。あゝ波靜に星影凍る北海の一夜、惜しませもせで逝きし操觚界の偉人を偲へば、双眸自むら迫つてベン運の運がも覺束ない。以下その一部の抄譯を試み、錦繡をかりて、腥臊を飾るを敢てするも、故人を思ふよすがともなれどのみである。)

自治案の前途を最も樂觀的に觀察しても、連年下院を通過し連年上院で否決せられ、かくて終に例の憲法上の改革により上院の採否に關せず直に勅裁を得て法律となるのであるが、その間に自由黨内閣が幾多の難

關を無事に切りぬけると見てからの事である。顧みて議場を一瞥すれば、曾て國民を熱狂せし虞翁や既に逝いて跡なく、後を襲ふべきモレー卿は上院に退いて、はや老來の氣を鼓する勇なかるべく、アスキス氏は未だ曾て如何なる事に關しても人心を熱狂せしめたる事なき政治家である。現内閣に於て、人を魅する魔力を有する唯一の人たるロイトジョーデ氏は社會問題に忙殺せられて全幅の力を注ぐ事能はず、臺閣多少寂寞の感がある。現政府は虞翁が有せざりし一百の多數の議員を有するけれども、それは合成的であつて、同質的でない。少くも自由黨員のあるものが、昔しローマの角闘士が叫んだ“Ave, imperator, morturi te salutant!” (Hail, emperor, men doomed to die salute thee!) を唱つて戰に臨まんとするも不思議ではない。

本年の議會は千九百三年の議會と大分形勢を異にしてゐるが、愛蘭國民黨の翼陣を張つてゐるは變りはない。ランドモンド氏の一令の下に動く八十五名の議員は嚴として控へてゐる。院内の William O'Brien 氏院外の Tim Healy 氏の如く Dillon 氏又は Devlin 氏同様熱烈な自治論者である。が困つた事にはバーネルは “If you help me to get Home Rule, I will give you possession of the land” と云ふ事を唯一のフオムラとして戰つたが、今や五十五万人中、三十万人は既に土地を所有し、その三十万人中の或者は、臚を得て蜀を望むの野心なく（ボナー、ロー氏は先きのベルファスト演説で、愛蘭人は土地買収の繼續、關稅の改革並に實業の發展以外に望む所なしと明言した）燃ゆるやうな昔時の熱情を失つた。農民のみならず僧侶間に於ても然りである。曾て自治問題の中心的運動をなした Croke 僧正は既に此の世を去り、Walsi 大僧正の如きは舊敎大學の設置に甘心して、恬として忘れたるが如く、今や愛蘭のために圍圍に呻吟してゐる様な人は一人もない。

愛蘭も桑滄の變をなした。慘憺たる荒廢の狀は一變して氣持の好い愉快な處となつた。實際英國農民改良

のためには、政府は何等の設置をもとらなかつたが、愛蘭農民のために、三千五百の貸家を造るに三千萬弗を支出した。従つて農民も頗る富有となり、最近二十年間に於ける貯金額や保険金額も頗る増大した。農業牧畜業も非常な進歩を遂げ、一昨年までに七萬エーカーの耕地を増加し、牧畜上の輸出は一年三千百弗に上るに至つた。是等の發展は Horace Plunkett 氏夫妻の創設にかゝる愛蘭農事協會の貢獻に待つ所が多い。

翻つて各政黨の旗幟を望めば、虞翁没後の自由黨には殆ど何等の大變遷もない。よしや熱烈ではなくとも尙孜々汲々として自治案に對して奮闘を擡げてゐる。

保守黨は無論反對の大旗を靡かしてゐるが昔の ("Non possumus!" (We cannot)) は時代錯誤たる事を承認してゐる。例の上院改革問題の當時、政府黨と保守黨との間に一種の密約進行中は、保守黨も自治案に對して多少認むる所があつたが、不幸にして不調に終つた。併し愛蘭人も自由黨も保守黨の領袖連が自治問題に關して一種の妥協を遂げんとする希望あるを世に知らしめんとする熱心を忘るゝ者はない。青年保守黨中では Marlborough 卿の如きは『保守黨の主義方針は没却せられたり。』と叫び Austen Chamberlain 氏の如きは

"Parliament is overworked and there is a case made out for an extension of local government. That had always been the Unions policy, but for Sir Edward Gray to talk about for Home Rule as if it were comparable to that kind of devolution for purely local affairs was to talk unworthy"

と述べたが Home Rule の extension of local government なる語の間には劃然たる區分をなすは難く、且つ devolution for purely local affairs なるズリケートな言葉は實に此の兩語の切つても切れぬ縁の糸である。

厄介なアルスターに關しては、自治案實施の曉には愛蘭より分離して英國殖民地の觀をなすは、單にダブ

リン議會に於けるアルスター議員の出席より受くる保護を奪去する劣惡の策であらうし、が氏は實施の際は、一揆は起るだらうが叛亂は起る事はあるまいと云ふ。由來アルスター人はワイワイ大分騒ぐがまさか云ふときには捨鉢になれぬ連中であるから。

財政に關しては虞翁時代と全く主客顛倒してゐる。虞翁が第一次の自治案を提出したときは愛蘭より英國國庫に千五百万弗を納入するやうに規定し、レドモンド氏も愛蘭が英國國債並びに陸海軍費を負擔する事の何等の異議をも挾まなかつたのである。然るに今や、一文でも拂ふ所か、却つて其の政府の維持費を要求してゐるではないか。ジョンブルは決して自腹を切つてでも愛蘭に自治を許すを欲するものではない。ある保守黨の議員は「We are familiar with a dowries, but who ever heard of subsidies for a divorcee?」と罵つたのは如何にも面白い。此處が實に自由黨の Crux である。

自由黨は未練ある愛蘭を離縁して、少くとも毎年千五百万圓の年賦手切金を拂はねばならぬとは一寸體裁の好い話ではないではあるまいか。

(八) "Peace and Concord"

時は四月十二日。議場は立錐の隙もなく滿され一種犯すべからざる森嚴淒涼の雰圍氣は何となく歴史的事件の起りつゝあるかを語るが如く見えた。アスキス氏は多分生來始てと思はる程の大喝采に迎へられて演壇に現はれた。

氏は千八百八十四年の選舉權擴張以來既に八回の総選舉を経たるも、其間變轉せる政府の政策中終始一貫せるもの一あり、是愛蘭自治案を極力固持せる事なりと説き例の英國議會を地方的責務より解除するは絶對

に必要なりと論じ自治案を可とする者、アルスターに於てさへ十六名、統一黨員十七名を得、自由黨に於ては一名を除く外、全黨一致なりと述べた。

内容は無論前述の物と同じである。氏の演説終りて、例のレドモンド氏は快辯流るゝか如く、賛成演説をなし、平和と一致とが大英帝國に洽からん事を神に祈ると結んだ。

今回の自治は無論絶對的自由を與ふる者でない。長い間の自由戦争を續けた愛蘭人に十分の満足を與ふるか頗る疑はしいものである。要するに一代の大政治家が、統一と分離のデイレンマに處して、最も巧妙に御茶を濁したものに過ぎない。統一黨の如きも絶體的反對の舉に出づるよりも、寧ろ有名無實の自由を與ふるものとして冷笑の間に葬り去らんと試みてゐるらしい。現に自治法案を評して“the measure establishing freedom under police supervision”と叫び、愛蘭國民黨總理 Canson 卿は“ridiculous and fantastic, and the safeguards are only delusion and mere palliative.”と冷罵した。

財界の人々は最も酷評を加へ上院の組織に言及して所謂保護の不完全を嗤笑した。

(九) “Why Asquith?!”

由來アスキス氏と自治問題とは深い因縁がある。壯にして虞翁の知遇をうけ、翁が第四次の内閣を組織したときは、一躍内相の椅子を占て臺閣上の人となつた。此の新進政治家の異常なる榮進に接し、“Why Asquith?”と世は驚嘆の眼をみはつた。翁が例の第二次の自治案を提出したとき、氏は非常に見事な雄辯を揮つて“Why Asquith?”なる問に、極めて満足な答解を興へ、世人は虞翁の炯眼、流石なりと敬服した。今や氏は翁の志を嗣ぎて、第三次の自治案を提けて議會に臨んだわけである。

却説、議案は政府が民撰によらず直接上院を設くる点に關し多大の反對あつたにも係らず、九十名の多數を以て第一讀會を通過し、九日には百〇一票の多數を以て第二次讀會を通過した。アスキス氏は議場を退出する際喝采をうけ、歸宅の節の再び歡呼の聲に送られた。氏の得意思ふ可しである。今の所では自治案の前途は洋々たるものである。

(十) “Chateau en Espagne?”

(自治問題と朝鮮の前途)

日影美しく輝き、漣波靜に洗ふ希臘の島に生まれた自由の思想と、山は翠に聳へ、河は白う流るゝ羅馬の國に起つた立憲の精神とは最近四百年の經過に融け合つて、燦然たる近世政治史の頁を彩つた。近世政治史は、獨立を保たんがために、人種的に宗教的に統一せんとする民族的運動と、自由を樂しまんがために、クラスの支配をマスの支配に移さんとする國民的努力とに要した波動の記録である。愛蘭問題は此の波動に全く全じ波長を以て其鳴を續け來たつたのである。時代の趨勢は必ずや愛蘭をして其の欲する所の物を得しめるであらふ。嘗てバルフォア氏は、『何故に加奈太、濠州、希望峯殖民地に與へられたる憲法と根本的に同様なる憲法を合衆王國に與へんとするに反對するか、彼等は地方的事務を處理しゆく、獨立せる諸州より成り、吾人の憲法に於ては下院に相當する中央議會によりて支配せられ行くに非ずや』てう論を駁して曰く『加奈太濠州、南亞の如きは分離より集成に進化せるものにして、吾が合衆王國と全く發展の經路を異にせるを遺却せるものなり。見よかの加奈加、濠州、南亞、米、獨の如きは悉く統一の必要を切實に自覺し、分裂し亂離せる國土の統一を多大の犠牲を拂ひて遂けたるに非ずや、あゝ此等の國の隆盛を羨みて之に倣はんとする論

者にして、之を致したる政策と全然昇駢せる方針をとらんとするは是れ東に達せんとして西に走るに非る乎』と痛撃を加へたが、集成と混合は相似て異なる、英愛の關係は果して集成であらうか、はた混合であらうか。多年兩國の繋争は寧ろ其の後者たる事を示すであるまいか。

愛蘭に一種の獨立と自由とを與ふる事は寧ろ英帝國を秩序的に統一する所以ではあるまいか。獨立と自由とは延いて國家の經濟力の横溢を導き、終には帝國主義の基礎をなすものであるまいか。人種政治學者の如きは人種間に優劣を認むるを以て帝國主義の根本的思想と説き、前説の如き全くのツフヒズムの様であるが、少くとも似非^{パラス}是説でないにして亦半面の眞理を具へたものではあるまいか。

愛蘭に一種の獨立と自由とを與ふる事は果して英帝國の帝國主義と矛盾するであらうか。斯様な問題には吾國の如きも他日——少くとも長日月を出でずして逢着するであらふと思ふ。臺灣、樺太は兎も角、かの朝鮮は如何であるか。

今や吾國は毎年二千五百万圓の自販を切つて、その啓發に力めてゐるが、他日人智進み産業振興し經濟的獨立を遂げたる曉に於ては、奮然蹶起して參政權を要求し、更に百尺竿頭一步を進めて自治を叫び獨立を欲する事がないと斷言出來やうか。否々、百年の歴史は百年の未來を語る。日比谷原頭の一角に他日朝鮮黨の議員が叱咤する事を豫期するも誰か吾人をユートピア裡の人なりと罵り得る者ぞ。而も朝鮮の裏面には儉疎なる露國の暗中飛躍を忘るゝ事は出來ない。垂涎三千丈、唯、機を覗ふ露國は、必ずや、朝鮮人の此の感情を利用して私服を肥すに吝なる者でない。嘗て畏くも 詔勅にも宣へる如く『韓國ノ存亡ハ實ニ帝國安危ノ繫ル所ナリ。』吾國は朝鮮のためなら、世界とも戦はねばならぬ。あゝ他日鷄林八道アラランの歌消れて、ホーム、

ルールの聲起るとき、内治問題は忽ち一變して對外問題となり。東洋の天地は鐵火の裡に葬らるゝ時なりと覺悟せねばならぬ。今や邦人の注意は只管東進し南進し又西進せんとす。吾人感ずる所あつて愛蘭自治問題を説いた。

『朝鮮は日本の愛蘭なり』の一句を以て此の稿を結ぶ。

稿を起して旬日、今や全國の政戰、既に終を告げて蕭風の候に入る。筆を投ずれば、良夜月なく星亦稀なり。窓前の綠、愈深うして徒に夜光の流るゝにまかす。一椀の苦茗、胸中の悲傷寂寞云ふ可からず。あゝ是れ不文拙辭徒に罪を龍南の諸兄に得たるがためか。(五月二十日夜)

陰 の 行 方

北 村 直 躬

をのゝく筆に、「巖頭の感」を遺して、暗く淀んだ華嚴の瀑壺に、あたら青春の身を投じた男のあつて以來、いく度、懷疑に瞬く星の光は「不可解」の宇宙を匝つたであらう。世紀病の黒ずんだ腕に掴まれたる彼が、飢餓に疲れし一身の肉と血と骨とを、日光の泡立つ瀑水に、惜しげもなく捨て去つた、その先覺者らしき行動は、全く當時の動搖して居た、言はず未開といふ羈縛を脱して、漸く文明の悲哀に染まんとして居た青年の心を酔はして了つた。丁度、未開地に於ける惡疫が、無薪にも、「神」の幼影に絶る蠻人等を、瞬くひまに奪ひ去る如く、又は水の上に落された油滴が、清き水の面をば、その銀紫色に光る毒々しい色を以て蔽ひ行く如く、彼の男が文明より受けたるその心臓の鼓動を以て、華嚴の瀑壺に起した、強き鋭き水の波動は、悲し